

事例で深める!

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

福島県立ふたば未来学園中学校・高校

ゼミ担当教師全員で生徒を見取り、

形成的評価を総括的評価につなげる

人材育成要件のルーブリックを 探究学習の評価軸に

田村 貴校は、「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)を教育活動の中心に位置づけて教育課程を編成されていると伺いました。

林 本校は建学の精神「変革者たれ」を具現化すべく、創立時から総合探究を「未来創造探究」と名づけ、地域や世界の課題に取り組み実践プロジェクトを展開しています。1年次前期は、学校設定科目「地域創造と人間生活」(*)で地域の課題を理解するためにフィールドワークを行い、それを表現する演劇を創作します。後期は、「未来創造探究」に移行して本格的に探究学習を始め

ます。2年次からは、生徒の関心に応じて「原子力災害・伝承」「共生社会」などの6つのゼミに分かれ、個人またはチームで活動します。1ゼミあたり3〜4人の教師が、所属する生徒20〜30人を担当します。そして、2年次10月の中間発表、3年次5月の最終発表会を経て、11月までに卒業論文を作成するという流れです。3年間で計6単位を配置し、「地域創造と人間生活」も含めた体系的なカリキュラムとしています。
田村 他教科と連携したカリキュラムを意図的に設計している点も含め、学習指導要領の総則が示す、学校の教育目標を明確にし、総合探究の目標と連携した教育課程として好例だと思います。

福島県立ふたば未来学園中学校・高校プロフィール



林 裕文 (企画 研究開発部主任。地歴歴史・公民科 [世界史])

設立 2015 (平成27) 年
形態 全日制/総合学科/共学
生徒数 1学年約150人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、福島大、茨城大、東京大、福島県立医科大、東京都立大などに16人が合格。私立大は、東北学院大、慶應義塾大、上智大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ102人が合格。短大・専門学校進学23人。就職23人。

林 本校は、教育活動全般で育成を目指す11の資質・能力を定義しており、そのルーブリック (P. 2 図1) を「未来創造探究」の学習評価の軸として教師間・教師と生徒間で共有しています。

田村 育成を目指す資質・能力を生徒と共有し、ルーブリックに基づいて生徒が自己評価を行うことは、生徒のメタ認知能力を高め、成長を促す上で極めて有効です。

林 ルーブリックによる生徒の自己評価は年2回行っています。特に2年次10〜12月に行う「ルーブリック面談」を重視しています。10月の中間発表後の自己評価を基に、生徒とゼミの担当教師が1対1で対話



アドバイザー

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官

田村 学

たむら・まなふ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』(東洋館出版社) など多数。

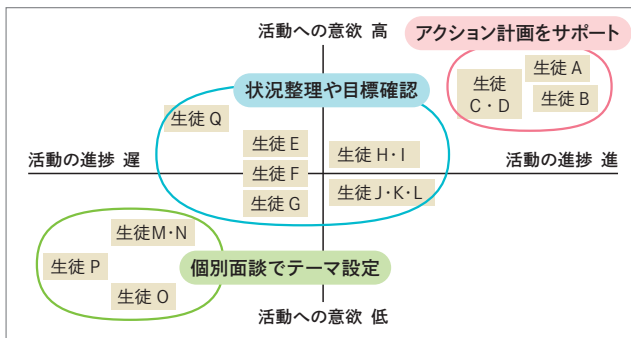
*「産業社会と人間」の代替として設定。

図1 人材育成要件・ルーブリック (抜粋)

学力概念	資質・能力・態度	レベル1	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	社会的課題に関する知識と理解 一般常識や基礎学力とともに、世界・社会の状況の変化や課題を理解するための知識を身につける。	地域や社会の成り立ちに関する基礎的な知識を得る。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、他者に説明できるレベルまで理解する。
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	思考力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができるようになる。	与えられた情報を整理できる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれず、本質的・根源的な問いを立て、多面的に考えることができる。

「学力概念」は上記のほか、「人格」「自らを振り返り変えていく力(メタ認知)」を設定。「資質・能力・態度」は上記のほか、「前向き・チャレンジ」「自分を変える力」などを含め、全11項目がある。

図2 生徒の現状を可視化するマトリクス表(例)



教師が毎回の授業で見取った生徒の様子を出し合い、「活動への意欲」と「活動の進捗」の2軸で評価して、マトリクス表に各生徒を配置。生徒の現状を可視化して共有することで、今後の支援策を具体的に検討しやすくなっている。

※図1・2ともに学校資料を基に編集部で作成。

し、生徒が活動を通じてどの資質・能力が身についたのか、最終発表までにどのような活動をするかといったことを言語化します。

田村 生徒にとって教師との対話は、自分を見つめ、成長を実感し、称賛を得ることで意欲が湧き、今

後の方向性を明確にできる、学習改善の重要な機会になっていますね。

林 ゼミの担当教師が原則週1回集まる「ゼミミーティング」も、生徒支援と学習評価において重要な役割を果たしています。そこでは、生徒一人ひとりについて見取った

資質・能力を軸とした教師と生徒の対話が内在化につながる

田村 貴校の実践は、教師間や教師と生徒間の対話の軸が「資質・能力」になっている点に重要な意味がある。

ことを出し合い、「活動への意欲」と「活動の進捗」の2軸のマトリクス表(図2)で生徒の現状を可視化します。その上で、例えば意欲・進捗ともに課題がある生徒には、「個別に面談をしてテーマ設定を支援する」といった具体策を立てます。

田村 それは素晴らしい取り組みですね。1人の生徒を複数の教師で見取ることで、主観によらない生徒の姿が具体的に見え、その過程は形成的評価としても機能します。

林 蓄積された形成的評価の情報は、学期末と学年末の総括的評価に活用しています。評価の記述では、到達度(調べ学習の域か、行動に至っているかなど)に応じた文言のひな型を作成し、それを参考に記述することで、教師による評価の文言のばらつきを抑えるようにしています。

ります。生徒が身につけたい資質・能力について繰り返し話すことで、教師・生徒それぞれにその資質・能力が内在化し、日常的に「あの取り組みがこの力の向上につながった」などと語り合える文化が生まれます。ルーブリックは教師と生徒が自覚的に活用してこそ、その価値が発揮されます。

林 ルーブリック面談に限らず、生徒はゼミの担当教師によく相談していますが、それが重要なのですね。

田村 今後の展望としては、11の資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」にひもづけて整理することが考えられます。各教科・科目の学びが探究学習にどうつながるのか、どの教科・科目の学びがどの資質・能力の育成を重点的に担うのが、より鮮明になります。

また、探究学習の基礎を培う1年次も、現在のルーブリックを基に学習評価を実施するとよいと思います。生徒の3年間の成長の軌跡がより可視化され、評価の精度が高まることも期待できます。